



濱田あや

チェンバロ奏者

ケネス・ワイズ氏に師事した濱田あやさん。今夏、アメリカから一時帰国され、大阪や名古屋でリサイタルを開催されました。久しぶりとなる日本滞在の合間に、お話しを伺うことができました。

HAMADA AYA

profile

兵庫県出身。ジュリアード音楽院古楽演奏科修士課程の第一期生を特待生として修了。ロンドン音楽祭コンクール第一位、ヨゼフ・ホフマン・ピアノコンクール第二位、MSM協奏曲コンクール、アーティスト・インターナショナル・オーディション等で受賞。レザール・フロリサンとのチェンバロ伴奏要員、およびサンテスプリ・フランス教会専属奏者。2015年にレオンハルト氏の愛器で録音した「ジャック・デュフリ：クラヴサン曲集」をリリース。ニューヨーク・マンハッタン在住。趣味はトライアスロン(プロ級)。

——ジュリアード音楽院に行かれたのはなぜなのか。

濱田 ジュリアードがあこがれの存在だったというのが大きいです。たくさん優れた音楽家が輩出されています。もちろんフランスやオランダに留学される方も多いのですが、国にとらわれずに様々なことを広範囲に勉強したくてジュリアードを選びました。

——そこでケネス・ワイズ氏と出会った。

濱田 いいえ。入学した当初はジュリアードのチェンバロ専攻科で、ライオンネル・パーティという人について勉強しました。とても個性的な先生でいい経験になりました。私自身、最初の留学先がジュリアードでとても良かったと思っています。

——ワイズ氏と会ったのはどのくらいってからだったのでしょうか。

濱田 2年ほど勉強した後です。ジュリアードに古楽演奏(Historical Performance)科が新設されるというニュースが入ってきました。しかも、ウィリアム・クリスティとケネス等が来てマスタークラスが開かれると…。それにはオーディションがある。ジュリアード以外で勉強されている方も受けに来て大変でした。私はオーディションに受かって、めでたくマスタークラスを受けられることになったのです。

——それはクリスティに、それともワイズですか。そう言えば、お二人ともアメリカ人ですし、ワイズはレザール・フロリサンに関わっていましたね。

濱田 チェンバロのマスタークラスはケネスです。クリスティはそのとき、室内楽とかアンサンブルの指導をされました。ジュリアードはクリスティがまず客員教授として、いろんな部門、学部を指揮する立場となり、ワイズや他のヴァイオリンの先生たちもいっしょにいらっしやいました。

——ケネスさんに初めてのレッスン受けられて…。

濱田 マスタークラスは1回限りです。でも、今まで習ってきた教え方とはずいぶん違ったアプローチをされる方だなあと感じとても興味がわきました。ぜひ習ってみたいという想いが強くなりました。

——その時は何を弾かれたのですか

濱田 ラモーのクラヴサン曲集から「ミューズたちの対話」と「一つ目の巨人」です。

——そこで師事しようとお決めになったのですか。

濱田 いいパフォーマーだなあ、というか表現者だなと思って。それで、新設を機に是非と思ったのですが、また、ジュリアードのオーディション。新設されるというのでとても注目が高かったのか、全世界から100人くらいオーディションを受けに来て！しかも、チェンバロは2人しか取らないと。

——えっ？ チェンバロに100人も来たのですか。

濱田 はい、凄く来ましたよ。

——その100人の中から選ばれた。凄くないですか。

濱田 いえいえ。新設されたばかりで注目度が高かったのは、クリスティの名前もありましたしね。私は本当にケネスに師事したかった。オーディションに合格し、それから彼の門下生としての生活がはじまりました。ジュリアードの古楽演奏科のプログラムは2年間なのですが、ケネス先生はお住まいがパリだったので、生徒2人を見るために、毎週飛行機に乗り木曜日の夜に来て金曜日にレッスンして土曜日か日曜日に帰るみたいな、パリ～ニューヨークを往復なさっておられました。私はケネスにとってはじめての個人の生徒で私が第1号だったわけですが、それだけに後進に伝えていきたいと思っても強く、一生懸命教えてくださいましたのだと思います。大変ご苦労だったと思いますが、私たちにとはとても丁寧に親身になって長時間レッスンをしてくださいました。

——どんな内容のレッスンだったのでしょうか。

濱田 いちばん最初のレッスンのときは、バッハの「半音階的幻想曲とフーガ」を弾いたのですが、とても熱心に教えてくださいました。例えば、チェンバロという楽器の表現方法、音の出し方、響きの出し方といった細かいことを丁寧に教えてくださいました。これはもう一言たりとも聴き逃してはいけないなと思って、私は全てのレッスンをテープに録り、レッスンノートを作って、そこに書き記していきました。本当に全部聴き逃すまいと！今回インタビューのお話があったので、その自分のレッスンノートをニューヨークから持ってきました。今日、新幹線の中で読み返していたのですが、(ノートを開いて)このように一つ一つ、2回目のレッスンからは絶対忘れないようにと思って、全部、何を

注意されたか書きました。教えていただいたことにまた今あらためて気づかされる、ということは多いです。レッスンの中心はもちろん、技術的なことも少しはあるのですが、どう表現するか、いかにきちんと人を惹き付ける演奏をするか、それがほんとに細部にわたって、どんな音色を出したいかとか、どんなフレージングにしたいかとか、自分で考えて演奏をするようにというアイデアをたくさんいただいたのが、彼のレッスンですね。

——2年間師事されて、濱田さんもしタイトルされるようになりましたね。

濱田 卒業してからは顔を合わせる事が少なくなりましたが、お互いリサイタルが近づくと弾きあって意見を出したりするようになりました。私自身、ニューヨークで年に1回は必ずありましたし、他の都市、カナダなどでリサイタルがあるとき、彼に助言してもらったり、逆にケネスのを聴いたり(笑)とか、お互い聴き合うことはよくしましたよ。プログラミングって大事でしょ？ 今度こんな曲をやらうかなと考えたときの相談や、楽譜の貸し借りなどで今も交流は続いています。



前回の公演後、上野のレストランで。

——濱田さんの方からパリへは。

濱田 よく行きますよ。私のCDもパリで録音したので相談にのってもらいました。それこそレコーディングの日は毎日お昼ごはんを作ってくださいました。人間的にもとても温かい人です。

——彼の家で？ いいですね。どこにあるのですか。

濱田 はい。ノートルダム大聖堂の近くです。

——チェンバリストはたくさんいますが、同じ演奏家として他の演奏家と比べ、どうところがケネス・ワイズのよいところだと思いますか。

濱田 一番いいと思うのは、人間味があふれる演奏ということ。演奏って、その人間の人間味を表現するものだと思うのです。演奏を聴いていると、彼の優しい人間性だったり、温かいところが音色に現われているなあと思います。歌心あふれる演奏です。どうしてもチェンバロというと、リズムカルな部分を強調して弾く演奏家も多いのですが、

そうではなくて、もちろんダイナミックなときもありますけれど、どんな技巧的な作品においても、長いフレーズを歌心を大切にしながら創り上げていくところはさすがだなあと感じます。

——私たちはレオンハルトをはじめ多くのチェンバロ奏者の演奏を体験する機会がありました。ケネス氏は指が早く回る技巧派というのではない。彼を2回招聘して、平均律もやったけれど、美しい音を出す人だなあといつも感じます。響かせ方というのでしょうか…。

濱田 そうですね。私は習っているときに言われたのですが、それはケネスがレオンハルトから言われたことだそうなのですが、自分の出した音のイメージがちゃんとないと、自分で練り出す(創り出す)ことが出来ない、とよく仰っていました。本当に自分でこういう音を出したい、こういう音色を出したい、と常に一音一音しっかりイメージをもっておかないと、チェンバロってというのは表現が難しい楽器なのです。歌うこと、旋律的に聴こえさせるには音色のイメージをちゃんと持つようにと言われたことが、やはり先生の演奏を聴くと良くわかりますよね。

——レオンハルトとケネスの共通点を感じられることはありますか。

濱田 楽器に対する真摯な姿勢、アプローチ、奇をてらうとかいうのではなく、作品に対して真摯に向きあうところですね。

——楽器を選ぶことも大事なのでしょう。

濱田 もちろんです。よくない楽器からはいいい音も出てきません。よい楽器との出会いがあり、自分がちゃんと反応できる。楽器の持つ良さをフルに生かされるか、そこが優れた演奏家か否かの差だと思います。ケネスの場合は、楽器の持つ音色、パレットからすべてを表現することが出来る。自分の対応力、常日頃から自分の持っている優れた音楽性をコンサートで出し切れるかが重要だと感じます。

——今回のプログラムについて、聴きどころを。

濱田 「フランス組曲の第5番」はよく知られています。「フランス風序曲」は規模が大きくてバッハの構築性を堪能してもらえるとと思いますし、「半音階的幻想曲とフーガ」はとても技巧の華やかな作品です。バッハの作品の中でもバラエティに富んでいて素晴らしいと思いま

す。フランスものはもっとあってもいいくらい。そう言えば、ケネスは去年と今年、クーブランのプロジェクトをやっています。バッハは、フランソワ・クーブランの曲を知っていて、アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽帳の中にもクーブランの曲を筆写するなど、フランス作品の影響をずいぶん受けています。フランスのバロック、しかもクーブランはその代表。ケネスならではの装飾音の入れ方とか、フレンチ・エスプリのきいた機知に富んだ演奏が愉しめると思います。

フランスの流れとドイツ的なものとの組み合わせがとてもいいのではないのでしょうか。ケネスは「フランス風序曲」が大好きですから、ケネス・ワイズ・ワールドが充分堪能できるプログラムだと確信します。

——ケネスを日本で聴かれて発見とか、感じたことはありますか。

濱田 1回目の来日時より2回目の方がお客さんとコミュニケーションが取れていたという気がします。前回、平均律という大きなプロジェクトでしたが、日本のお客さんは真剣に静かに集中力を持って聴いてくださるので、ケネスもそれに合わせて集中力がアップしてよくコミュニケーションがとれていたと感じました。3回目はもっとよくなることでしよう。

ケネスは兵庫県立芸術文化センター、東京文化会館小ホールともに気に入っていて、再訪を心待ちにしているようです。

——最後に現在のチェンバロ界について、いかがでしょうか。

濱田 いまはとても新しい風が入ってきています。ジャン・ロンドーのような若い世代も台頭してきて、チェンバロ界は盛り上がっています。とてもよい時代だと思います。その波に乗って皆さまにもチェンバロ音楽をたくさん聴いて欲しいです。



ジャック・デュフリ：クラヴサン曲集
濱田あや(チェンバロ)
WWWCC-7784
(2014年4月/パリ、ノートルダム・ド・ボン・スクール
病院礼拝堂にて収録。)
発売元:LIVENOTES Nami Records Co. Ltd

[ケネス・ワイズ チェンバロ・リサイタル 日本公演スケジュール]
2月22日(木) 19:00 東京 東京文化会館小ホール
24日(土) 14:00 西宮 兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホール
25日(日) 14:00 名古屋 宗次ホール